慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	小島三郎君を偲ぶ(故小島三郎教授追悼号)
Sub Title	
Author	清水, 龍瑩
Publisher	
Publication year	1986
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.28, No.特別号 (1986. 4) ,p.i- ii
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-19860410-04053897

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

小島三郎君を偲ぶ

慶応義塾大学教授小島三郎君は昭和59年7月急逝された。あまりの突然の逝去に人々は驚き，嘆き悲しんだ。小島さんは，その前年あたりから，2期にわたる商学部長の激務のため，徐々に体調をこわされていたらしい。しかし持前の責任感と旺盛な学究心とから，学部長の責務を着実に遂行され，同時にまた専門である科学論の研究を真摯に追求され，一時たりとも休むことはなかった。御家族，同僚はみな小島さんの体のことを心配し，いろいろ忠告したが，小島さんの学部のため，学問のためという責任感はおとろえず，教授会で学部長に3選されると，蒼白な面持で一時断わりかけたが，やはり引受けられてしまった。しかし体調の崩れはいかんともし難く，58年11月に慶応義塾大学病院に入院されてしまった。その後大手術をうけ，奥様をはじめ御家族全員の献心的な看護にもかかわらず，また小島さんの強烈な意欲にもかかわらず，病気が全身をむしばみ，59年3月に小康をえて鎌倉の御自宅に戻られたが，7月に訃報に接することになった。

小島さんは，故小高泰雄教授門下の俊秀として，昭和28年慶応義塾大学経済学部を卒業，直ちに大学院修士課程に進み，経済学部副手，商学部助手，助教授，教授を経て，54年学部長に就任された。このような順調な例は慶応では他に例がみられない。この間ドイツ経営学説史を専攻され，さらに学説史整序のための方法的基礎を求めて科学論にまで進んでいかれた。生前の御当人の話によると，初め知らずに経営哲学の本を読んで，これが経営学だと勘違いされ，経営学研究の道に入られてしまったそうである。どうも技術論的な経営学になじまれず，マックス・ウェーバーの科学方法論に立脚する学説史研究に向われ，最後には現代科学哲学にまで入られてしまったらしい。このように小島さんの頭脳はとびぬけて明晰であったため，他の人が到底寄りつけない，学問の中の学問である科学哲学に向わざるをえなかった。ドイツ経営学説史研究では40歳代で日本の学会の最高峰となられ，小島シューレは学会の中でも最も強力な研究集団となっていった。その後進まれた科学哲学では，論理実証主義が横行する中で早くからカール・ポパーの批判的合理主義科学哲学に注目され，10年も経たないうちにドイツの科学論を凌駕するようになり，亡くなる2，3年前頃から，ドイツの科学論の学者がわざわざ小島さんと議論するために日本にくるほどになった。小島さんが学会であの温顔で質問に立たれると場内がシュンとする程であった。その学問に対する情熱は凄じく，亡くなる直前の6月までベッドに仰向けのまま執筆活動をつづけられていた。

このような学問に対するはげしい情熱の一方，友人，弟子達に対しては非常に優しく，一度小島さんに会った人でその誠実さに惹かれない人は一人もいなかった。大学院の学生に御自分の研究室

を占居されても文句も言えず，図書館で一人で本を読んでいられた。小生が書評をお頼みしておいたら入院される寸前にそれを書き上げて下さった。さぞ辛かったろうと痛恨の至りである。また学部長の激務にありながらも絶えずまわりの人々に気をくばられ，膨大な枚数の年賀状などにも自筆の部分をつけられていた。そして亡くなる直前の5，6月頃，親しかった友人すべてに，あのちょっと縦ながのくせのある字で，現在の病状とそれまでの感謝の気持を手紙で書かれてきた。しかしこれが小島さんの最後の気くばりとなってしまった。

われわれ商学部スタッフ一同小島さんの気持を忘れず，また小島さんの築かれた学部の学究的雰囲気を守りつづけたいと思っている。心から小島さんの御冥福をお祈りいたします。

1985年秋

商学部長

清　水　龍　瑩